

Indiana University 留学記



飯田 雅

Hitoshi Iida

Indiana University School of Medicine, Center for Diabetes and Metabolic Disease

はじめに

私は2016年10月より米国インディアナ州の州都インディアナポリスにあるインディアナ大学のCarmella Evans-Molina准教授の研究室にポスドクとして留学し、糖尿病の基礎研究に携わっています。当Evans-Molina研究室は膵β細胞におけるカルシウムホメオスタシスに強く、私は現在、小胞体ストレスとインスリンプロセシングの関係について研究しています。留学後の時間の流れはとても早く、渡米後5日目で働き始め、その後約半年で結果をまとめ、2017年6月の米国糖尿病学会に発表することができました。その後も小規模ながら2つの研究会でポスター発表を行いました。アメリカ人の同僚からはワーカホリックかと心配されるほどですが、家族との時間も増え非常に充実した日々を過ごしています。

私が留学を志したきっかけは、ご指導いただいた順天堂大学代謝内分泌学の綿田裕孝教授と同医局長である荻原 健先生の勧めがあったからです。しかし最終的な決め手となったのは、当時2歳になったばかりの子供を連れての留学に対して不安があったものの、それを払拭するような現地の人々の支えがあるということがわかったこと、そして、渡米前から上記の研究テーマについてCarmellaと議論した結果、実験のプランができあがっていることが

わかり非常に興味を引かれたからです。

人と人をつなげるインディアナ

日本人にはあまり馴染みがないかも知れないインディアナ州ですが、私がここに留学することになったのは、実はただならぬ縁故があったことでした。現在所属している研究所のセンター長をRaghavendra G. Mirmira (Raghu)教授が務めておられ、綿田教授とは留学時代のご友人でした。そのRaghu教授が立ち上げた研究室に、荻原先生が留学されていました。そして荻原先生が留学中に研究をともにしていた、Carmellaが立ち上げた研究室をご紹介いただきました。そこには研究室発足当時から支え続けてきた、日本人研究者の河野龍義先生がおられ、公私ともにお世話になっております。このような脈々とつながったご縁があり、研究所のメンバーは日本人研究者に対して非常によいイメージを持っていただいている、国籍を問わずすぐに仲間ができて環境に馴染むことができました。

また河野先生はINDY-Tomorrowという日本人研究者ネットワークを指揮されおり、現在私も運営スタッフとして関わらせていただいています。ここでは研究分野や所属などを問わず、活発な議論がなされており、私のような縁故が無くても、日本人留学生を支える素地ができあがって